第2回　日本医師会　赤ひげ大賞

心と体支える5氏

心を治すカウンセリング

下田憲氏（北海道南富良野町）

心の言葉で（宮川浩和撮影）

しもだ・けん　けん三のことば館クリニック院長。昭和22年、埼玉県生まれ。66歳。北海道大学医学部卒。国立長崎中央病院、離島の公立病院勤務、北海道厚生連山部厚生病院院長を経て、平成16年、けん三のことば館クリニックを開設。

「ひたすらに耐え、ひたすらに待つというとっても深い愛情が有る」。北海道南富良野町にある「けん三のことば館クリニック」の壁にはそんな言葉が貼られている。ほかにも心に響く内容の手書きの短い言葉がいたるところに。すべて院長の下田憲医師が書いたものだ。

「短い詩の形にしているが、患者さんとの触れ合いでいただいたもの。読みながら、泣いて帰る人が何人もいる。すべてを自分に置き換えているんでしょうね」。1カ月に2度、この言葉は必ず換える。朝3時に起き、「本当に、心のままに書いている」という。

ユニークな医院名だが、もともとは町の人が集まって小さなイベントを開けるようにと下田院長が建てたもの。「けん三のことば館」と名付けていたが、クリニックにするときに、そのまま名前を引き継いだ。知らない人には「『言葉の訓練をしているところですか』と聞かれたりする」と笑う。

治療方針もユニークだ。東洋医学と西洋医学を併用し、目指すは「安上がりの医療」だ。

「毎日40人くらいの患者さんに鍼（はり）治療を無償で行っている。手間と鍼の材料代はかかるが、効果があり副作用がない。もうひとつがカウンセリング。心の傷は薬では治せない。カウンセリングで治す」。まさに赤ひげ先生。地方からの予約診察は2カ月待ちだ。

以前いた病院では120人の在宅の患者を抱えていた。今も乳児から98歳までを診て、気軽に往診も行う。「ここでやれることをやる。救急を作らないようにきちんと管理し、必要に応じて入院施設のある病院につなぐ」。地域医療が果たす役割の重さを心に刻み、今日も治療に当たる。（松垣透）

病気を持った「人」を診る

野村良彦氏（神奈川県横須賀市）

厚い信頼（瀧誠四郎撮影）

のむら・よしひこ　野村内科クリニック院長。昭和21年、京都府生まれ。67歳。日本大学医学部卒。同大助手、横須賀市立市民病院呼吸器科長などを経て、平成7年に野村内科クリニック開業。現在、横須賀市医師会地域保健対策委員会の委員長も務める。

「病気だけを診るのではなく、病気を持った『人』を診る」。かかりつけ医として患者の生活や性格までも把握した全人的な医療を掲げ、外来診療から在宅医療まで幅広い現場で地域医療を支えている。

13年間務めていた横須賀市立市民病院を離れ、同市内に野村内科クリニックを開業したのは平成7年。市民病院時代に約600人分の死亡診断書を病院で書いたが、「本当は家で死にたかったんじゃないか。それを病室で選択肢のないまま看取（みと）っていたのではないか」と疑問を感じ、開業を決意した。

在宅医療は病院を中心に半径7キロ以内で1日6人程度を巡回している。受け持っている患者は現在約100人おり、2歳の人工呼吸器を付けた女児から100歳を超える高齢者まで幅広い。訪問先の家庭では、患者だけでなく家族とも会話して患者の食事や睡眠時間などについて聞き取りをする。

「どういう所で寝起きしているのか、どうやってトイレに行っているのか、在宅医療は入院医療の出前ではなく、生活に即した医療をすることです」。これがかかりつけ医のあるべき姿だと自信が持てたのは、開業してから5年後のことだった。

高齢の患者と向き合うとき第一に考えるのは、家族が納得できる形で自宅で看取りができる環境を整えることだ。がんなどに伴う痛みを取り除く治療はもちろんするが、無駄な延命治療や命を縮めることはしない。

「人は100％死ぬ。それは生活の一部であり、医療が支配する場面でもありません」と持論を語る。

これまで寿命が迫っている患者と酒を酌み交わしたり、患者の家族から食事会に招待されたりした。かかりつけ医として患者やその家族と厚い信頼関係を築いている証しだ。（田中俊之）

自宅で看取れる町づくり

小鳥輝男氏（滋賀県東近江市）

「いい子やなぁ」（安元雄太撮影）

おどり・てるお　小串医院院長。昭和20年生まれ。68歳。京都大医学部卒。京大医学部付属病院勤務を経て、米国ハーバード大学医学部留学。福井医科大学医学部付属病院放射線科助教授を経て、平成3年に小串医院副院長。滋賀県医師会副会長などを歴任。診療科は内科、外科、小児科、放射線科。

定期健診先の保育園で、小鳥医師は一人一人に声をかけた。

「あ～ん。よう見えたぁ。上手に開いたぁ。いい子やなぁ」

「ママ」

「わし、ママ違うなぁ。平和な息してるなぁ、大丈夫や」

そして園児のお礼に、いちいち頭を下げて応える。「はい、ありがとうございます」

琵琶湖の東側に位置する滋賀県東近江市の「小串医院」院長。腰の低さはどこででも同じだ。平成19年、医療や介護、保健の専門職のネットワーク「三方よし研究会」を立ち上げた。近江商人にちなんで「患者よし、医療機関よし、地域よし」を掲げる。月例会には毎回100人超が参加。膝詰めで議論する。「こういう関係になるのに5年くらいかかりました」

ある会員は、人柄を語る。「ええ話なら、ちゃんと聞いてくれる人。だれが言ったかは関係ない。『三方よし』が広がったのは、小鳥先生がいたから」

「三方よし」は理念だけではない。脳卒中の地域連携パスを開始し、医療機関の役割分担を進めると、病院の平均在院日数は減った。その一方で、患者が家に帰れない理由も検討した。社会資源、施設の空き、患者・家族の理解、地域力。原因は何か、専門職はどう関わるか―。患者が途方に暮れないよう、地域が1つの病院のように機能するのが願いだ。

「大切なのは、関係者の顔が見える関係。三方よしを通じて患者さんが真ん中で、われわれ皆が支えていると、患者さんに気づいてもらえたことがありがたい」

ゴールは町づくり。次の目標は在宅看取りを当たり前にすること。「看取りは文化です。昔はみんな、家で看取ったんですから」（佐藤好美）

第2回「赤ひげ大賞」（5人）

下田憲	北海道	けん三のことば館クリニック院長
野村良彦	神奈川	野村内科クリニック院長
小鳥輝男	滋賀	小串医院院長
大岩香苗	兵庫	大岩診療所院長
白石吉彦	島根	隠岐広域連合立隠岐島前病院院長

日本医師会　赤ひげ大賞　日本医師会と産経新聞社が共催で、地域に密着して人々の健康を支えている医師の功績をたたえて広く国民に伝えるとともに、次代の日本を支える地域医療の大切さをアピールする事業として平成24年に創設。全国の都道府県医師会から推薦された「地域住民の健康を支えている医師」「離島や過疎地域での活動など地域の現場医療に貢献した医師」から、毎年1回、5人を選考委員会で選定し表彰する。

日本医師会　横倉義武会長

第2回「赤ひげ大賞」の受賞者が決定し、日々献身的に地域医療に取り組まれている5名の先生方を表彰できることをうれしく思います。

本賞は、山本周五郎の有名な時代小説『赤ひげ診療譚（たん）』に由来して命名されました。黒澤明監督が映画化したことで、多くの方にも親しまれておりますが、「赤ひげ先生」といえば、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く頼もしい医師というイメージを思い起こさせます。

病に苦しむ人がいれば何としても助けたいというのが医療人の願いであり、医療の本質は当時も今も変わりません。

地域へ一層の密着を

わが国は、2025（平成37）年には団塊世代が後期高齢者となり、高齢化のピークを迎えます。それまでの残された時間で、かかりつけ医を中心とした地域のネットワークを作らなくてはいけません。地域住民の方々に寄り添った形での医療の一層の展開に向け、全国の赤ひげ先生の活躍に期待しています。

ＢＳフジで30日放送　表彰式は28日、東京・内幸町の帝国ホテルで開催される。５人の大賞受賞者の日頃の活動と表彰式の模様「密着！かかりつけ医たちの奮闘～第２回赤ひげ大賞受賞者～」はＢＳフジで30日正午から放送予定。

【主催】日本医師会、産経新聞社　【後援】厚生労働省、フジテレビジョン、ＢＳフジ　【特別協賛】ジャパンワクチン株式会社

力をあわせて、未来を守る

ワクチンによる予防こそが、これからの医療の中核になる。
ましてや感染症の予防は、ひとりを守るだけでなく、
その周辺の人々、ひいては社会や、この国そのものを守ることになる。
そう信じる私たちは、新しい時代に向かって、力強く歩み続けていきます。

ジャパンワクチン株式会社

japanvaccine.co.jp

第2回　日本医師会

赤ひげ大賞

厳粛に受賞者を選ぶ委員たち＝東京都文京区の日本医師会館（荻窪佳撮影）

31人の候補者　僻地や離島での貢献重視

「赤ひげ大賞」を決める選考会は東京都文京区の日本医師会館で開かれ、各都道府県医師会の推薦を受けた31人の候補者の中から、最終の5人を決める議論が行われた。選考にあたって重視されたのは地域医療への貢献度。今村聡・日本医師会副会長は「地域を支えるため頑張ってきたが、日の当たらなかった医師を顕彰したい」と強調。原徳壽・厚生労働省医政局長も「苦労が多い僻地医療や離島医療に一貫して取り組む姿勢を評価した」と話した。

一方、今回初めて女性医師が「赤ひげ大賞」に選ばれたことについて、羽毛田信吾・昭和館館長は「女性ならではの地域医療への貢献のあり方のモデルケースになる」と評価した。

「70歳未満」という年齢制限のため選に漏れた候補者が複数いたことにも話がおよび、羽毛田氏は「『後進の模範になるか』という視点でみれば、立派な方がおられた」と指摘。タレントの山田邦子さんは「（推薦書類を）読めば読むほど、素晴らしい先生がおられた」と語った。

司会を務めた石川広己・日本医師会常任理事は、今回の選考について、「赤ひげにふさわしい先生ばかりで甲乙つけがたかった」と話した。

■選考委員

羽毛田信吾	昭和館館長、宮内庁参与
向井千秋	宇宙航空研究開発機構（ＪＡＸＡ）特任参与
山田邦子	タレント
小林光恵	作家
原徳壽	厚生労働省医政局長
羽生田俊	参議院議員・日本医師会参与
今村聡	日本医師会副会長
石川広己	同常任理事
三上裕司	元日本医師会常任理事
外山衆司	産経新聞社専務取締役
河合雅司	同論説委員

■オブザーバー

長野明　ジャパンワクチン社長

地域で献身的な医療活動に取り組む医師を顕彰する第２回「日本医師会　赤ひげ大賞」の表彰式が28日、東京都内で開催される。大賞に選ばれたのは全国各地で活躍する５人の医師たちだ。選考会の模様とともに、受賞者の日頃の活動を紹介する。

地域医療 住民に笑顔

家庭問題から子育てまで

大岩香苗氏（兵庫県上郡町）

貴重な相談相手（松永渉平撮影）

「最初は、少しでも役に立てばという軽い気持ちでした」

兵庫県上郡町にある大岩診療所。院長の大岩香苗医師は外科医で、住民の健康を守ってきた「頼もしき存在」だ。

医師を志したのは、外科医だった父親の影響が大きい。「痛がる患者さんに処置する父親を見て、子供ながらにすごいなと思いました」

大学卒業後、病院勤務を経て、実家である同県相生市の外科病院に戻った。開業は昭和63年1月。大学で同期だった外科医の敏彦さんと結婚し、子供にも恵まれていたが、卒業して6年足らずの若さだった。

当時、町内には入院施設のある医療機関もなければ、外科医もいなかった。「地元の方々から父に『診療所を造ってほしい』と要望がありました。父は私が暇そうにしていると思ったのでしょう」と笑う。

子供を身ごもった大きなおなかのまま救急車に同乗し、心臓マッサージをしながら総合病院に向かったこともある。しかし、持ち味は女医ならではの気遣いや細やかさにある。「おじいちゃんの面倒をよくみてきたよね」「折り紙はまだやっているの？」。診察だけでなく、患者との会話を重視する。

女性患者にとっては貴重な相談相手だ。「『話を聞いてもらえてスッとした』という人もいる。聞くだけでもいいかなと思っています」。持ち込まれるのは医療の話だけではない。仕事や家庭問題から子育てまで、まさに町民の心の支えだ。

2～3年のつもりが、あっという間に年月が流れた。「2人が健康なうちは、やれるだけのことはやろう」。夫と二人三脚で切り盛りしてきた診療所を、地域のために今後も守っていくつもりだ。（河合雅司）

おおいわ・かなえ　医療法人大誠会大岩診療所院長。昭和33年、兵庫県生まれ。56歳。鳥取大学卒業後、岡山大学医学部第一外科や岡山済生会総合病院、半田外科病院（現・医療法人天馬会半田中央病院）の勤務を経て、63年１月から現職。

「介護と医療」をひとつに

白石吉彦氏（島根県西ノ島町）

教え合い、助け合う（宮川浩和撮影）

日本海に浮かぶ島根県西ノ島町。本州の港からフェリーで2時間半かかる離島唯一の病院に勤めて16年になる。

「僻地医療と聞くと、『頑張ってるな。でも自分には無理』と思ってしまうのが普通。でもぼくは、そのイメージを変えたい。だって、楽しいことがやりたくてここに来たんです」

徳島県出身。全世界を旅するのが夢だった。高校3年の夏、「手に職を持ちたい」と自治医大の受験を決意。卒業後、故郷で地域医療に携わった後、医大の後輩だった妻の裕子さん（45）の出身地である島根県に。「1年だけだから頑張れよ」と送り出されたのが、離島医療に携わるきっかけだった。

赴任してすぐ、肺炎の重症患者を担当した。手を尽くして治療したが、退院から1カ月後、男性は寝たきりになっていた。

「病気を治すだけではだめだ。介護と医療がひとつになった地域包括ケアを実現しなければ」。そんな思いから、介護現場のヘルパーと病院職員が共に患者のケアを考える「サービス調整会議」の開催を決めた。会議は月2回、16年間続く。

病院と2カ所の診療所で医師の「複数制」を取るのも、特徴のひとつだ。徳島の山奥の診療所に先輩と勤務していたとき、「ひとりで何もかもやるのは無理。教え合い、助け合いながら続けることが大切だ」と学んだ。島前病院と近隣の診療所の医師を交代で診察に充て、島外の学会や研修会にも積極的に出席させる。決してひとりにはしない。

離島に赴任した医師の奮闘を描いた漫画の主人公になぞらえられるたび、笑って否定する。

「ぼくはドクターコトーじゃない。〝チーム島前病院〟の一員なんです」（道丸摩耶）

しらいし・よしひこ　隠岐広域連合立隠岐島前病院院長。昭和41年、徳島県生まれ。47歳。自治医大卒。徳島大医学部付属病院、国民健康保険相生診療所（徳島県）などの勤務を経て、平成10年から島前町村組合立島前診療所（現・隠岐島前病院）。13年から院長。

羽毛田信吾委員　審査を通じ、高齢化や過疎化が進行する厳しい条件の下において、地域住民の医療確保のため地道に活動する医師の存在の重要さを再認識した。選考に当たり、地域の関係者間の連携に努力している点も評価の対象とした。「赤ひげ大賞」が地域医療に献身的に活動する、情熱あふれる医師の増加に大きく貢献することを願っている。

向井千秋委員　受賞者の皆さま、おめでとうございます。地域医療の充実や向上に長年尽力されている皆さまに、心から敬意を表します。ＩＴや最新技術で、より広い地域に医療システムを構築している白石先生や、女性初の大岩先生の受賞は、従来の「赤ひげ先生」の持つイメージをより拡大させてくれたと思います。さらなる活躍を期待しています。

山田邦子委員　選考資料をじっくり読み、私たちはたくさんの医師に支えられ、元気に生きていけるんだと改めて勇気づけられた。今回は女性医師も受賞された。子育てや教育が大変な中での活躍には、かなりのバイタリティーが必要だと思う。私がかかった乳がんにもすごく力を入れていらっしゃるが、長い緩和ケアが必要な病気であり、患者の相談にすべて乗っておられるのは素晴らしい。

小林光恵委員　先生方が全国各所で精力的に地域医療に取り組んでいらっしゃる様子に触れて、大変心強く感じた。どの方の活動も素晴らしく、点差をつけるのは難しかったが、審査においては「リハビリ、看護、介護、栄養部門などの他職種との連携」「多くの医師がまねしたい、まねできるかもしれない、と思える医師像」といった点も意識した。

原徳壽委員　選考に携わらせていただく中で、改めて、こうした先生方のご尽力により、日本の医療が支えられていることを認識した。「赤ひげ大賞」は、地域の住民の方々の身近なところで医療に携わる先生方の社会への貢献をたたえる取り組みであり、非常に意義深いものだと考えている。

長野明社長　昨年にも増して多くの都道府県医師会より推薦があった候補者の中から、限られた人数の受賞者を選ばれた選考委員の方々は、大変難しい選考を迫られたと感じている。受賞された皆さまは、僻地、離島といった立地条件下での地域住民への献身的な取り組みや、女性外科医師としての医療・保健全般にわたる地道な努力、より深化したチーム医療体制の展開に向けた不断の取り組みなどを進めておられ、「かかりつけ医」とは、診療を核としつつも、地域住民の生活や心の支えになっている存在であることを確信した。

推薦方法と推薦基準

【推薦方法】各都道府県医師会長が１人ずつ推薦

【推薦基準】過疎の医療現場、とくに僻地、離島などで住民を支えている医師▽障害を持った方や高齢者が安心して暮らせるような活動を行っている医師▽地域における学校保健活動、公衆衛生活動を通じ、特段に地域住民の健康管理を推進している医師▽医療環境整備や社会活動を通じて町づくりへ貢献している医師▽原則として70歳未満の現役の医師